



ロンドンの金融街にあるUBS銀行の巨大な建物

ロンドンで暮らして⑦

ロンドン生活で覚えた英語

日系銀行勤務

由紀子アンダーセン

格調高いクイーンズイングリッシュの習得を期待していたが…

私がヨーロッパに来る前に日本でしていた仕事は毎日英語を使う環境でのものだった。英語を母国語としない国の組織だったので、互いに外国語としての英語をコミュニケーション手段に使い、正確でわかりやすい、誤解のない英語を第一目標としていた。

とはいっても一歩職場を離れれば周りは完全日本語環境。英語力を伸ばそうと、海外の連続ドラマやホームコメディをテレビでできるだけ見るよう努めていた。イギリス英語はよく、「アメリカ英語よりきちんと発音されるので日本人にはわかりやすい」と言われていて、BBCのアナウンサーの話す英語はなるほどクリアで聞き取りやすく感じた。イ

ギリスに住めば、格調高いクイーンズイングリッシュをマスターできるかと期待していた。

米英語と大違い

しかし残念ながら、こちらに来てニュース以外のテレビ番組を見て何と言っているのかわからないことが多かった。それにロンドンでは人種の垣塙、様々な民族・国籍の人が英語を共通語として暮らしている。知らぬ人と話すことの少ない都会生活では、クイーンズイングリッシュを話すイギリス人にはなかなかお目にかかることがない。さらに純粹なイギリス人でも地方の訛りや慣用語の多用などで聞き取れないことが

多い。

結局、ロンドンに住んで気づいたのは、イギリス英語は今まで私が使っていた英語とちよつと違う、私が日本で学習したのはアメリカ英語が基本であつたらしいということだつた。

当たり前のことかもしれないが、いわゆるビジネス英語と日常生活で使う英語とでも、語彙や表現が違う。それまで留学や長期海外生活体験を持たなかつた私が、海外で生活して初めて知り使うようになつた単語や表現は数限りなくある。今回はそのような言葉について例をあげて報告したいと思う。

短縮語・頭字語

まず新聞や雑誌を読んでよく目につくのが短縮語。お茶好きの英国人にとって「一杯のお茶」は「cuppa」[㉮]、お昼に食べるサンドイッチは「sammy」[㉮]、テレビで見る連続ドラマは「romcom」あるいは「sitcom」[㉮]、寝る時に着るパジャマは「PJs」[㉮]、夏の風物詩のバーベキューは「barbie」[㉮]、野菜は「veg」[㉮]、だんな様は「hubby」[㉮]だ。



アンダーグラウンドはロンドンでは地下鉄のこと。米英語のサブウェイは地下道の意味



スーパーの特売でよくある「一個買えばもう一個無料」は「BOGOF」と短縮される。由緒あるオックスフォード英語辞典にも出ているイギリス英語



各種電話サービスを提供する店のこと

一般社会人として働く人と給与明細で目にする源泉課税はPAYE¹⁸、スーパーの特売でよくある「1個買えばもう1個は無料」はBOGOF¹⁹と短縮される。職場のEメールなどでよく使われる言葉ではASAP²⁰、TBC²¹、BTW²²、FYI²³等がある。ただ、こういった短縮語・頭字語は知っていると便利だが、ものによっては過度に使用すると対外的な文書としての印象があまり良くないので社外宛文書ではきちんとスペルした

¹ a cup of tea
² sandwich
³ romantic comedy/situation comedy
⁴ pajamas "pee-jayz"
⁵ barbeque
⁶ vegetable
⁷ husband
 省庁名などでも防衛省はMoD⁸、国の保健部はDH⁹、国会議員はMP¹⁰と頭字語となるのが普通。企業名のケンタッキーフライドチキン¹¹は日本でもKFC¹²と呼ばれるし、英国放送協会BBC¹³をフルネームで呼ぶ人はいない。英国石油はBP¹⁴と短縮することで事業拡大し「石油事業だけではない」をアピール。また、日本でもおなじみのアイビーエム (IBM¹⁵) の正式名称やユービー

エス (UBS¹⁵) 銀行が二つの銀行の統合名であること知る人は少ないかもしれない。
⁸ Ministry of Defense
⁹ Department of Health
¹⁰ Member of Parliament
¹¹ Kentucky Fried Chicken
¹² British Broadcasting Corporation
¹³ British Petroleum
¹⁴ International Business Machines
¹⁵ Union Bank of Switzerland と Swiss Bank Corporation

有名人の名前も短縮

三面記事のゴシップ欄では、有名人の名前も短縮される。例えば最近日本でも流行っているアメリカのドラマシリーズに出演している女優のサラ・ジェシカ・パーカーはSJPと名前のイニシャルをとって頭字語となる。同じく女優のリンゼイ・ローハンはLiloとなるのは日本で木村拓哉が「キムタク」となるのと近い感覚。本名の後にAKA¹⁶「通称」だけそれと紹介しておいてその後はその通称を使うようなケースもよくある。また、ワールドカップサッカーの2006年には、選手の妻や恋人達、WAGS¹⁷の動向が逐一報告されていて、彼女達自身は必ずしも有名人ではないので、本名の後に必ず「WAGSの一人」と注釈されていた。

¹⁶ also know as
¹⁷ wives and girlfriends of footballers
 なお、イギリスに限らず、一般的に愛称としての個人名の省略はよくある。例えばMichaelがMikeやMick、AndrewがAndy、AlexanderがAlexなど、単純に頭の方の音をとる場合で、WilliamがWillだけでなくBillになったり、RobertがBob、RebeccaがBeccaなど、必ずしも最初の音が残らない場合もある。社内のダイレクトリーで同僚のフルネームを探す時に、愛称だけ知っているのと本名を見つけれずに困ることがある。



英国ではサッカーとは言わずフットボールと言う。フルハム地区にあるチェルシーフットボールクラブ



スローンストリートにある仏の高級ブランド、エルメスの店舗(改装中の写真)。仏語への敬意からか、英国でも仏語のように最初のHは発音せず、エルメスと言う



英国は緑色の信号をグリーンライトというが、日本では緑色の信号でも「青信号」というのは不思議な感じ

方が良いだろう。

- ¹⁸ pay-as-you-earn
- ¹⁹ buy-one-get-one-free
- ²⁰ as soon as possible (できるだけ早く)
- ²¹ to be confirmed (後で確認)
- ²² by the way (ちなみに)
- ²³ for your information (御参考まで)

他には携帯電話のメール(こちらではテキストという)でよく使われる書言葉のみでの省略文字があり、YouはU、forは4、toは2で代用される。語呂がよいせいか、広告コピーなどでもよく使われているようだ。

職場での新語・専門用語

私の前職は英系の会計監査機関で個人所得税関係の仕事であったが、関係当局である税務署やクライアント企業宛の専門的な文書が多かった。同僚との間のEメールは別として、そういった硬い内容の文書ではおのずと形式ばった難しい単語が使われがちだ。私の場合、日本の職場でも比較的硬い表現を多用していたつもりだったが、ここでの仕事を通じてさらに新しく知った単語は数多い。

例えば日本人駐在員の税金を課税年度の日・英国滞在日数に分けて計上するapportionは日本語で「按分する」と訳すが、日本で働いていた時にはこの日本語でさえ使ったこ

とがなかった。とはいっても、これは会計や税務関係のjargon(専門用語・特殊用語)の範疇に入るせいかもしれない。また、substantial(かなりの、相当な)やsignificant(重要な)もそれまでの私にはbig word(大言壮語)だったが、今では相応の文脈で使われるとさほど違和感はなく、積極的に使っている。

また、当時の職場の上司があまりに仕事を先延ばしにするので覚えた言葉procrastinate(先延ばしにする)、趣味の料理関係の雑誌を読んでいるとよく出てくるscrumptious(おいしい)、sumptuous(豪華な、贅沢な)も日本では知らなかった言葉だ。他のものと簡単な言葉やイデオムで言い換えることもできるが、こういった難しめの単語は使

慣れるとちよつとインテリな印象を相手に与える効果があるようだ。

さらに、それまで英語でどう表現するか知らなかった「文字化け」garbledや、一言には訳しにくい状況に合わせて便利に使える(口語)言葉として知ったdodgyも前職場で知った新語だ。sort outは通常「整理する」だが、様々な問題を「解決する」意味でよく使い、文字通りとると大げさな表現である「Give me a shout」声をかけても同僚間で頻繁に使われるのを耳にした。英語を母国語とする人が周りにいる環境は日常会話表現で学ぶことが多く興味深かった。

イギリス英語

イギリスとアメリカで使われる単語の違いについては学校で習ったもので例えば地下鉄²⁴・茄子²⁵等があるが、ポテトチップス²⁶やおむつ²⁷についてはこちらに来るまで知らなかった。ちなみにイギリスでチップスといえば「フライドポテト」を意味する。

- ²⁴ underground(英)/subway(米)
- ²⁵ aubergine(英)/eggplant(米)
- ²⁶ potato crisp(英)/potato chip(米)
- ²⁷ nappy(英)/diaper(米)



経済紙ファイナンシャルタイムズはオレンジ色に見えるが、一般にピンクペーパーと呼ばれている

イギリス独特のものではソーセージとマッシュポテトは *bangers and mash* と呼ばれ、*rasher* はスライスしたベーコンのことだ。ごみは日本では *garbage* とか *waste* を使って表現していたが、こちらでは *rubbish* という単語も良く使われる。*pinky* (*pinafore* の短縮語) は *apron* 「エプロン」のことで、英国人に嫁いだ友人は義母から「食事時には *pinky* を外しなさい」と言われて何のことかわからず戸惑ったと話していた。また、*pudding* は「プリン」のことかと思っていたが、どうやら食後の甘いデザート全般をさしているよう。そしてイギリスの通貨 *pound* は日常会話ではよく *quid* と呼ばれている。

また、企業名等で日本では原語の発音にできるだけ忠実にカタカナ記載するのが通常だが、イギリス独特の発音と言ってしまった方が良いかは不明なもの、全く違った発音がされていることに驚いた。スウェーデンの家具や生活雑貨のイケア (*IKEA*) はイギリスでは大人気で「アイケア」と親しまれている。韓国の自動車会社のヒュンダイ (*HYUNDAI*) が「ハイユンダイ」とテレビから聞こえてきた時は、何

の宣伝なのか瞬時にはわからなかった。オランダの家電会社のブランドのひとつ、ブラウン (*BRAUN*) も「ブラウン」と発音されると全く別物に聞こえてしまう。

私の不得手

さて、日本語では例えば「青二才²⁸」、「青田買い²⁹」など、「若い、未熟」を意味して「青」が使われるが、英語では替わりにグリーン (緑) が使われる。他にも「青唐辛子³⁰」、「青りんご³¹」、「隣の芝生は青い³²」、「青じそ³³」、「青海苔³⁴」、「青物野菜³⁵」など「青」対「緑」の例には限りがない。これらは特に問題がないのだが、実は私が苦手としているのは信号の「青」、英語での *green light* である。これはどうしても、「青信号」と頭の中で思ってしまう、まず青を文字通りブルーと置き換えてしまうのだ。それから考え直してグリーンと訂正する。「信号が青だから渡ろう」と言う時も、すぐにはグリーンが口から出ず、間違っってブルーと言ってしまうこともある。り恥ずかしかった。

- ²⁸ green and fresh

- ²⁹ green harvest
- ³⁰ green chili
- ³¹ green apple
- ³² The grass is always greener on the other side (of the fence).
- ³³ green perilla
- ³⁴ green laver
- ³⁵ green stuff

もうひとつ私の不得手な単語に *water* がある。つい、「水」、つまり「冷水」と思ってしまうが英語で冷水は *cold water*、お湯は *hot water* どちらもウォーターである。冬になつたせいか水が (昨日より) 冷たいと言いたくて単に「ウォーターが冷たい」と言ってしまうと、聞いた相手には水が冷たいのかお湯がぬるいのが曖昧になってしまう。理屈ではわかっていますが、水イコールウォーターと覚えていて、お湯もウォーターの一種であることを忘れてしまいがちなのである。

こうした個人的に不得意な単語とは日々格闘を続けつつ、今後もより知的な語彙を増やしていきたいと願っている。